

「第10回愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会」に関する
傍聴者の御意見と傍聴者の質問に対する回答など

氏名	御意見	質問に対する回答など
近藤 ゆり子	<p>本日（2015年7月28日）、長良川河口堰最適運用検討委員会を傍聴しました。</p> <p>まだ噛み合っていないとはいえ、「国」から相当分量の「回答」があったこと及び多少なりとも共通認識の部分が発見できたことは前進と考えます。</p> <p>去る7月6日、長良川河口堰の本格運用開始20年めのその日、私は「よみがえれ長良川実行委員会」http://nagaragaw.jimdo.com/の一員として、国土交通大臣宛の「要請書」を中部地方整備局に持参しました。</p> <p>このとき、中部地整の担当者は（愛知県に「回答」をしたことを前提に）「愛知県が論点を整理したものを受け取って、合同会議をもつかどうかも含めて検討してほしい」とのことでした。つまり「ボールは愛知県の側にある」との認識です。</p> <p>木曾川水系に大きな関心を持ち続けている者として、このような河川管理者である「国」の受動的姿勢は、いかがなものか、とは思いますが（当日も「国」に対してそのように言いました）。</p> <p>さはさりながら、愛知県（知事及び県庁）には、さらなる積極的な対応を求めたいし、貴委員会にも期待したいと存じます。</p> <p>7月6日に中部地整に持参した「要請書（+別紙「集会宣言）」を、別添とします。</p>	

【別添】

要 請 書

2015年7月6日

国土交通大臣 太田昭宏さま

よみがえれ長良川 実行委員会
共同代表 粕谷志郎 亀井浩次

平素からの河川行政へのご尽力に感謝いたします。

私たちは、長良川を愛し、自然な長良川を取り戻して未来に手渡したいと願う者の集まりです。

20年前のきょう7月6日、大きな疑問と懸念の声が渦巻く中、長良川河口堰のゲートが閉鎖され、長良川は海から遮断されてしまいました。

私たちは、7月4日～5日、岐阜市の長良川の畔に集いました。7月5日のシンポジウムで、別紙のようなアピールを採択しました。

2010年、名古屋で開催された生物多様性COP10において、議長国である日本は「愛知ターゲット」をとりまとめました。日本政府（「国」）として、その実現に取り組むことが求められています。

国土交通省としても、1997年の河川法改正で河川管理の目的として盛り込まれた「河川環境の整備と保全」の中味をより一層深化していかなければなりません。

河口堰で毎日、毎年採られている環境データは、1980年代の「河川環境」の考え方の水準のまま、水質指標の数値の改善や水産資源としてのいくつかの種の個体数の維持に限定されています。生物多様性、生態系への目配りは全くないと言っても過言ではありません。愛知ターゲットの中間年でもある今年こそ、国際公約を果たすために「国」も動くときです。

長良川の再生のために決断をして下さい。

私たちは長良川を世界に誇れる豊かな清流とすることを願い、次のことを要望いたします。

記

1. 愛知県からの長良川河口堰開門調査の提案を、積極的に受け止めて下さい。

① 愛知県からの提案に応じて、速やかに合同会議を設置して下さい。

② 開門調査の具体的な時期や調査内容については、漁業関係者や研究者、環境団体関係者、法律家などを委員とする透明性・公開性のある委員会を設置し、広汎な市民の意見が反映できるようにして下さい。

2. 木曾川水系連絡導水路事業は、現在は凍結され、「検証中」となっています。積極的な必要論は出ていません。この事業を根拠づけている木曾川水系水資源開発基本計画（フルプラン）は全部変更の時期を迎えました。水需要の鈍化・減少は明白です。木曾川水系連絡導水路事業を、フルプランから外し、中止する方向で、検討して下さい。

以上

別紙

「よみがえれ長良川」集会宣言

「室の川だった長良川は、魚の棲まないおぞい川になってしまいました。清流長良川は昔のことです。」長良川とともに生きてきた川漁師の悲痛な言葉です。

長良川の河口を塞ぐ河口堰のゲートが閉鎖されて、明日7月6日で20年になります。海との繋がりを断たれて、長良川の環境は大きく変わりました。

河口堰下流部の豊かなヤマトシジミの漁場が失われました。堰上流部では、汽水域がなくなり、広大な芦原は9割が姿を消し、生き物たちは棲みかと命を奪われました。堰はサツキマス、アユ、ウナギ、ヨシノボリなど、海と川を行き来する生き物の大きな障害となっています。長良川の象徴でもあるアユの漁獲高も激減し、魚苗センターでの稚鮎の生産と、漁協による河口の人工水路での孵化放流で、ようやく漁獲を確保している現状です。人の手を借りてしか個体数を維持できないこ

とから、昨年、岐阜市のレッドリストで準絶滅危惧種に選定されてしまいました。もの言えぬ生き物たちが私たちに、長良川の変化を必死で訴えているように思われます。河口堰の影響は下流部だけでなく中流、上流へと及んできているのです。

この20年は、失われてしまったものがいかに大切なものであったかを、改めて考えさせられる年月でもありました。川の恵みを未来につなぐためにも、長良川をかつてのような、海とつながる豊かな川に再生しなければなりません。

今、流域では農業や林業、伝統産業、観光などさまざまな分野で、地域にある豊かな資源を大切に使い、新たな取り組みをはじめめる若者たちや動きが生まれています。「鵜飼漁の技術」が国の重要無形民俗文化財に指定され、長良川中、上流域が「世界農業遺産」登録を目指すなど脚光をあびています。

那珂川からの報告では、地域に根付いた漁業を守るために立ち上がった人々に感動しました。

「川も流れてこそよみがえる。」

撤去が進む球磨川の荒瀬ダム現地からの報告を伺って、そのことを確信し、希望を持つことができました。

河口堰の目的であった工業用水は一滴も使われていません。最大の利水者である愛知県が委員会を設置し、環境改善のために河口堰の試験開門をしようと提案をしています。2010年に名古屋で開催された生物多様性 COP 10で採択された愛知ターゲットの中間年でもある今年こそ、長良川の再生のための大きな一歩を踏み出すときです。一日も早く、国と愛知、岐阜、三重の関係各県が話し合いをもち、開門調査を開始することを切望します。

長良川をよみがえらせるため、流域の、そして全国の心ある人々とともに、私たちはこれからも努力を続けていきます。

2015年7月5日

「よみがえれ長良川～河口堰20年・開門調査実現を！」集会参加者一同